

# お夏笠物狂

ウタ  
「よやい恋と云字を金糸でぬちせ

裾すそに清十郎と寐た所

上ルリ  
くちんずればゆめの世や

ぬてあたためしふとこころ子

いつの間にかはうかれ出いで

三界さんがいをたぶ家いえとして

そで笠かさ雨あめのやどりにも

心こころとぬ飯枕いひまくらながれにあらぬ

川竹かわたけのやいの小笠おさのびんざいら

花の手をおひお手をひかれた  
 これも熊野の修行かや  
 姉さんなふ是勅進柄杓の  
 笑顔よしとて柳がまぬく  
 やなぎの髪のなにゆへに

うき世うらこて尼が寄  
 尼が寄とハ海近しなせに  
 そなたハしほがない節ハ哀に  
 身ハ伊達に唄ハ念佛の唄比丘尼  
 合  
 むかひ通るハ清十郎じやないかいの

筵がよく似た菅のふ筵がやうつとハ  
よく似たるにやら入筵をしるべの  
物狂ものくるひ「ものにくろふがわれはかうかハ  
鐘かねにまらよひ鳥とりにハわかれ  
恋こひする人のよな〜を

氣違きちがひとてなワらひたまひそ  
つたへ聞きく孔子こうしハ鯉魚りぎよにワかれ  
おもひの火を胸むねに焚たき白居易はくきよみハ  
子を先まき立て枕まくらに残のこ薬くすりをうらむ  
それは子ゆへのわかれのなこだ

親おやより子よりワが身より  
いとしののびのことしほや  
それよりびんきおとづれの  
聲ことをきかねば顔も見えず  
われはあき鹿しかつまをこふ

かいろとなくとしらせたや  
なぶくあれなる僧おんつがとのご  
かへしてたぐ何国いづくへ連つれて行ゆくことを  
イヤお僧とひがめおやわれもながる  
丸太舟まるたふね浮世うきよを渡わたらひと節ふしを

うたへやうたへうたかたの  
「舟ふねつくりておなつをのせて  
花はなの清十郎に艫かをおさしよへ  
観音くわんおんやつたのちかひに枯かれたる  
木きにもはながやこしにさいたハ

柳なぎの葉はひとえだふたえだ  
三日まいに三枚まい 七日まいに七枚  
きせう誓紙せいしの牛王ごわうのうらなく  
灰はいに焼やつゝたがひに吞のんだる  
水みづももらさぬなが〜に

ひきもあわせぬ神ごころ  
熊野の神はお留ま<sup>らす</sup>かや  
あしがら箱根<sup>はこね</sup>玉つしま  
貴船<sup>きふね</sup>や三輪<sup>みわ</sup>の明神<sup>めいじん</sup>も神とも  
覚ぬ神<sup>たづね</sup>ならば尋<sup>たづね</sup>人にあはせて  
み<sup>みな</sup>な<sup>いづほり</sup>皆偽<sup>いつはり</sup>の御神<sup>みかみ</sup>とそしつても  
祈<sup>いのち</sup>ても神<sup>かみ</sup>の力<sup>ちから</sup>もかなはぬかと  
笠<sup>かさ</sup>とかとじとかなぐつすて  
くろしなげくぞあはれなる